

アラスカは世界で最も軽飛行機が発達した土地である。地上交通がほとんど不可能であったからだろうが、まるでセスナが自動車がわりに乗り回されている。しかし我々のように山岳地帯の氷河に降りたいとなると、自動車がわりにしているだけでは、資格不十分である。それには操縦技術もさることながら、山岳地域の地形と気象に広く精通していなければならぬ。複雑な地形とそれにとまらぬ気流。雲の動きや悪天の兆候。常に変動する氷河の状態。また安全対策等はいりまでもない。並のパイロットではとても勤まらないのである。そこでこのブッシュパイロットが登場するのである。彼等は意外と歴史をもっている人達であり、その最も輝かしいものは、北極探検時代であった。現在ではその数も極く少い。今、アラスカで活躍しているパイロットは、グルカナのウイルソン、タルキートナのシエルダン、アンカレッジのハントレーの3名に代表される。その他に数人いるが、技術と経験からして、あまり信用できるものではない。経験からいえば、ウイルソンが一番古いらしい。私達は現地でシエルダンより料金が安いと聞き、最初彼に交渉をした。しかし私達が指定する場所には降りないという返事であった。結局、私達は日本から連絡してあったシエルダンに依頼した。シエルダンはマッキンレー近くに基地をもち、近年の日本隊の多くを運んでいる。特にマッキンレーの登山者が多くなるにつれ、彼の名声は高くなってきている。私達は、彼のことにについてはもちろん一面識もなく、何一つ知らなかったのであるが、今回飛行機事故という特殊なケースの中で、彼の人となりを知り、私達にとり忘れ得ない一人となったのである。彼との最初の出合は、パクソンの飛行場であった。飛行場といっても原っぱといった方が適切なのであるが、彼は危げなく着陸した。そして降りるなり、こちらに向かって大きな声で話しかけてきた。やたらとオーバーなジェスチャーで、奇声を発し、おせじを使い、ユーモアたっぷりであった。長靴にセーター、正チャン帽という出立で、パイロットというイメージから程遠いものを感じた。一口に言えばサーカスの曲乗りといった感じで、なんとなく不安に思い、一同顔を見合せたものである。この不安は、この後で遠からずのものになってしまっ

た。今だかつて誰も降りたことのない氷河で着陸失敗、離陸不能となったのである。このときの彼のあわてぶりは大変なものであったらしい。一応テントや食糧等、自分のものをもっていたのであるが、十年來の事故で、このよ
うな大きなものは初めてらしかった。49才という高齢で、体もそう強くない彼としては、人一倍不安がるものも無理はなかった。しかし彼はその日のうちに米空軍の大型ヘリコプターに救出されている。彼はもともと空軍でヘリコプターに乗り、それからこの道に入ったそうである。もう飛行歴30年以上になる。この商売を始めて何年になるかは知らないが、彼はタルキートナ、エアサービスなる会社を一人で経営している。飛行、案内、契約、整備、修理、その他なんでも彼一人である。タルキートナでの彼は、なかなかのインテリである。さては客と接する時はビジネスに徹するのか。とにかく家庭では物静かな初老である。若い妻と幼い二人の娘があり、いかにもしあわせそうである。妻はさる航空会社の社長令嬢とか。事故が起きたときの彼女の態度は立派だった。私達が電話で、彼の飛行機が帰らないことを告げると、「どこかで不時着しているものと信じる。明日はきっと帰ってくるでしょう」と少しも取り乱すことなく、私達を勇気づけた。シエルダン自身も外見は小心な男に見えることもあるが、細心の注意を払った上で、思い切った行動をとる人であった。彼は健康に神経質なくらい気を使う。タバコも酒も飲まない。私達に向って、クライマーはタバコを吸うべきではないと言ったりした。コーヒーでさえ、なるべくさけているようであった。生活のリズム狂わすことを極力きらい、健康食をとっていた。そして一担飛行機に乗ると49才とは思えない。なによりも我々をして彼を信頼させたのは、彼の知識と経験であった。アラスカの山については、その山岳自体のことに限らず、有名な登山ルートに関してもよく知っていた。彼は登山家を運ぶことにより、また多くの書物によりそれを知るようになったのである。そして地形と気流、気象の変化、等々をあらゆる経験を通して自分のものにしていくようであった。氷河で着陸地点を探すとき、彼は最も真剣な眼差になる。あの年で、どうしてあんなにいい視力をもっているのか。白一色で解りにくい氷河

の傾斜や、クレバス、雪の状態までみてとり、地形と風向から進入路を決める。着陸体勢に入れば全神経を一点に集中している。飛行場に降りる時の顔とは大違いである。初めての場所なら、これほど結断力のいる時もないだろう。そして見事成功すれば、大きな声で得意満面である。横にいる我々としても決して気楽でいられるわけではない。とにかく不時着に近いものであることは、初めて乗ったものでもわかる。しかしこの飛行機は、かってに、かならず着陸するものだと思わなければ、最初から乗れるものではない。着陸後一番早く緊張を解くのはシエルダンである。恐怖の余韻を残して、やゝ呆然としている我々を、彼はもちまえのユーモアで我にかえしてくれる。パクソンで私達を不安にさせた彼のユーモアには、こんな効果があったのか。今にして思えば、飛行機が着陸するまで、彼は雇われた操縦士ではなく、我々の先導であり、リーダーであった。彼はその役目を彼の性格なりに、よく果たしていたと思う。とにかく現地で彼のことを悪く言う人がいなかったのは、彼の人柄であろう。アラスカでは、ちょっとした有名人であり、土地の人は大抵の名前を知っていた。商売がら、学者や写真家、富豪とのつき合いもあるらしく彼自身も博識がある。会社の経営も、観光会社とのつながりをちゃんともっていて、なかなかのやり手らしかった。またその反面、素朴な生活態度で人づき合いもやわらかい。やゝワンマンなところもあるが自分に厳しく、強い生活信条をもっていた。何よりもこの広大な土地で自由に生きているという感じが、私達にはうらやましいところであった。彼はやはり開拓時代の流れをくむ人間であろう。

17 アンカレッジ・ガイド

松本 繁文

ヨーロッパへの通道的存在のアンカレッジは、我々が着いた時空港の玄関道路など工事中でまだ、これからの新しい町という印象を受けた。空港よりダウンタウンに向いにつれ軽飛行機の需要が高いのであろう湖には水上飛機、道路横には、小さな飛行機がありセスナ機、パイパー機がずらーと並んでいた。ダウンタウンに入っても地震が多いせいが高い建物はなく敷地を